

# 「百歳時代」ロードマップ\*

－ 「無縁社会」における超高齢者の「縁活」－

金 恵 媛\*\*

(e-mail: hukukuru2012@gmail.com)

---

## 目 次

---

1. 問題の所在
  2. 「無縁社会」考
  3. 高齢期の「縁活」：インタビュー分析を通して
    - 3-1 調査の概要
    - 3-2 しなやかな「縁活」と「選択縁」
  4. おわりに
- 

## 1. 問題の所在

2012年10月1日現在、日本の高齢率（総人口に占める65歳以上人口の割合）は24.1%である<sup>1)</sup>。約4人に1人が高齢者という計算になり、紛れもない大衆長寿社会の到来である。大衆長寿社会では高齢層固有の問題とされてきた多くの解決課題が社会全体の問題として置換されていく。高齢者問題が若者の将来設計、日本社会の将来ビジョンの

---

\* 本研究はJSPS科研費24616009の助成を受けたものです。

\*\* 山口県立大学国際文化学部

1) 2012年10月1日現在、総人口1億2752万人に対し高齢人口は3079万人（24.1%）である。高齢人口のうち女性は1762万人で、性比（女性人口100人に対する男性人口）は74.8で以前女性が多数派を占めている。高齢人口を年齢構成別にみると、前期高齢者（65-74歳）1560万人（12.2%）に対し後期高齢者（75歳以上）が1519万人（11.9%）と、高齢期の長期化を指し示す僅差である（内閣府、2013：2頁）。

視座から議論される所以である。近年注目されている「孤独死」、「無縁社会」問題はその端的な例であろう。

社会的動物である人間があらゆるつながりから「無縁」な、天涯孤独な存在として生き続けるということはそもそも不可能なことに思える。しかし、「無縁」を「無援」に置き換えてみると、理解しやすいのではなかろうか<sup>2)</sup>。従来、この「無縁社会」「孤独死」「社会的孤立」問題については、それまでの人生の凝集ととする捉え方、したがって高齢者本人に帰責する個別問題とする見方が支配的であった。ところが近年の議論をみると、「無縁社会」は決して個別問題ではなく、社会全体が取り組むべき難題と見なされている。もちろん個人に対して大衆長寿時代に見合った人生設計・運営管理を促す、警鐘的題材としても用いられている。社会構成員一人ひとりによる自律的なライフコース選択と能動的な運営、その固有性・多様性が尊重される社会システムへの見直しが問われている。結局のところ「無縁社会」をめぐる議論をみると「孤独死」不安とセットで語られることが多い。そのため、死後の状況、主として「無縁仏」の観点から「無縁社会」が議論されることがしばしばである。しかし、人間関係のあり方が問われているという問題の原点に立ち戻ると、「無援社会」問題の本質はウェール・ダイング well-dying を実現する一連の過程、言い換えると、ウェール・ビーイング well-being、ウェール・エイジング well-aging の実践にあるといえよう。「無縁社会」をめぐる議論は、百歳時代ロードマップの実現を目指す取組みに他ならない。近年、健康長寿の達成者として百寿者を含む超高齢者（85歳以上）への注目が高まっている理由もここにあると考える。

以上の状況を踏まえて本稿では、まず、近年の「無援社会」「社会的孤立」をめぐる議論について、「無縁＝無援」化と高齢期のQOLの観点から考察する。ついで、日本人超高齢者（85歳以上）の「有縁」現状と特徴的な「縁活」<sup>3)</sup>について検討していく。資料は、筆者が85歳以上の日本人高齢者の協力を得て実施したインタビュー調査の結果

2) 山本・平松（2011）：79-80頁。

3) 「縁活」は、「あべのハルカス近鉄本店タワー館」の「楽しくて、日々の暮らしや地域、そして社会をちょっとよくするプログラムを、百貨店内で展開するプロジェクト」（<http://en-katsu.info/about/>）から援用した言葉である。流行語となった「婚活」のように、時代の変化を捉える行為者の能動性、活動の日常的側面を強調したことばといえる。「婚活」とは、結婚相手を見つけるための積極的な活動（合コンやお見合いパーティーへの参加、結婚相談所や情報サービス会社の利用など）を指し、『「婚活」時代』（山田昌弘・白河桃子（2008）、ディスカヴァー・トゥエンティワン）により社会的認知を得たことばである。就職活動の「就活」をもじった造語で、結婚しにくくなった現代において、より良い結婚に向けて、従来とは異なる多様な方法で積極的に活動する者が増加している実態をよく捉えている。伝統的な社会関係資本の見直しを迫られる今日、生活実態に沿ったよりしなやかな縁を創生していく能動性が求められるとする本稿の問題認識とも通底しているように思われる。そこで本稿では、「縁（＝社会とのつながり）を希求する能動的活動」という意味で「縁活」を用いる。

を用いる。「百歳時代」ロードマップの実現に向けて、アクティブ・エイジング社会<sup>4)</sup>における他者関係の具体例として調査参加者の「ささやかな勇気の積み重ね」<sup>5)</sup>を読み解いていきたい。

## 2. 無縁社会考

「無縁社会」はもはや広く社会的認知を得た言葉だといっても過言ではない。火付け役となったのはNHKの番組である<sup>6)</sup>。「新たな死」「自殺」「行き倒れ死」をキーワードとする「無縁社会～“無縁死”三万二千人の衝撃～」(以下、無縁番組)<sup>7)</sup>の放送を機に「無縁社会」衝撃が日本社会に広まっていったのである。全国の自治体を対象に得られた「行旅死亡人」3万2千人のデータ<sup>8)</sup>を手がかりとして、日本が「急速に<sup>9)</sup>“無縁社会”ともいえる絆を失った社会に変わりつつある現実」(板垣：73頁)を社会問題として喚起しようとしたものである。

当取材班は、無縁番組制作に至ったきっかけとして、2006年NHKスペシャル「ワーキングプア～働いても働いても豊かになれない～」の制作、2008年大晦日の日に日比谷公園で開催された「年越し派遣村」<sup>10)</sup>での51歳の男性との出会いを挙げている(NHK報

- 
- 4) WHOはアクティブ・エイジングActive Ageingを「人々が歳を重ねても生活の質が向上するように、健康、参加、安全の機会を最適化するプロセス」として定義し、個人のニーズ、希望、能力に応じて社会参加ができ、必要な援助が受けられる社会としている(WHO、1998：15頁)。
  - 5) NHK報道局取材班(2010)：345頁。
  - 6) 「無縁社会」は第27回ユークアン流行語大賞の「2010トップテン」入りを果たし、NHK「無縁社会」制作チームが受賞している。放送に対する社会的反響の大きさがみて取れる。<http://singo.jiyu.co.jp/nendo/2010.html>
  - 7) 「NHKスペシャル」(2010年1月31日(日)午後9時00～58分)。<http://www.nhk.or.jp/special/detail/2010/0131/>
  - 8) 日本の市町村全てに電話をかけ「誰にも看取られず、遺体が引き取られることもなく、無縁墓地に葬られていく人たち」(行旅死亡人)について調査を行った結果、「2008年度にはそうした『無縁死』ともいうべき新たな死が年間三万二千人にも上る」(NHK報道局取材班(2010a)：332頁)と記している。なおこの数字に対して稲葉は(2011：ii頁)、行政が葬儀費用を負担したケースの他にNPOや個人が対応したケースもあると考えられ、実際の無縁死は前記の行旅死亡人数を上回るのではと指摘する。
  - 9) 「急速に」という見方については議論の余地があろう。島田(2011：20-77頁)も指摘しているように、戦後の都市化過程において日本人が従来の村社会的有縁関係からの離脱を能動的に選択してきた事実は否めない。「無援社会」はしがらみの少ない人間関係、すなわち、個としての自由を希求した結果の一つである。半世紀以上をかけて形成してきた社会的価値なのである。しかし近年の「無援社会」への問題関心は、経済格差や地域コミュニティの崩壊などを急激な社会現象として捉える傾向にある。「無縁社会」不安とともに「急速に」「社会の責任」とする問題認識が広く支持されている理由であろう。

道局取材班(2010a) : 332 頁)。事実、無縁番組では「無縁社会」の主な背景を外的要因、すなわち急激な社会変化に求めている。とりわけ近年の構造不況のなかでの「社縁」の喪失に着目している。失うと最も危うい「縁」が仕事との縁、「社縁」だとし、「仕事という社会との接点は、その人に大切な居場所を与えてくれるもの」であり、「失業は生活の糧となる収入が失われるだけでなく、人間の存在価値が否定され、社会の中の居場所を失わせるもの」だと力説する(NHK報道局取材班(2010a) : 332 頁)。確かに戦後の都市化、核家族化の進展とともに「地縁」、「血縁」による相互扶助機能の多くが外部化されてきた。そのうえ、社会、個人のライフにおける職域の比重が肥大しつづけ、「社会全体で仕事と生活の双方の調和の実現を希求していかなければならない」<sup>11)</sup>というのが現状である。NHK取材班による前記の指摘は、日本社会における今日的「縁」の特性、そして伝統的な縁の形骸化、機能不全の現状を的確に捉えた知見だといえよう。

無縁番組に対する反響にも「社縁」の重みがよく表れている。「社縁」の喪失が「無縁」化を招いてしまう現実を証明するかのように、放送中・後には30~40歳代の若者から、「将来の自分だな」「私、かくじつに無縁死だわ」「無縁死予備軍だな」など、他人事とは思えないという「切実な」意見が多く寄せられたという<sup>12)</sup>。無縁番組に対する反響をさらにリードしていくように、NHKでは後続番組とキャンペーンが続き<sup>13)</sup>、「無縁社会」リスク、とりわけ「孤独死」不安に焦点を当てた世論の喚起が繰り返し行われた。

2010年の年末からは『朝日新聞』が企画シリーズ「孤族の国」<sup>14)</sup>の連載を始めており、「無縁社会」現象に関する社会的関心、不安はいっそう高まっていくことになる。「孤族の国」は、2010年末から翌年の7月末にわたって連載された全3部構成によるシリーズ記事である。第1部「男たち」、第2部「家族代行」、第3部「3・11から」というタイトルからわかるように、経済状況の変化による孤立、家族の変化、そして災害の影響など、人々を社会的孤立状態に陥らせる日常的・非日常的リスクに焦点を当て、誰もが当事者となり得る現状への自覚を促している。

「無縁社会」の問題はいつ頃から社会問題として認識されるようになったのであろうか。商

10) 「年越し派遣村」は、路上生活者に対して年越しの食料や寝る場所を提供するボランティアグループの活動1つである(NHK報道局取材班(2010) : 332 頁)。

11) 内閣府「仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章」。http://www.cao.go.jp/wlb/government/20barrier\_html/20html/charter.html

12) NHK「無縁社会プロジェクト」取材班編著(2010) : 213頁。

13) NHKの主な後続番組には「消えた高齢者“無縁社会”の闇」(2010年9月5日(日)午後9時00分~49分) http://www.nhk.or.jp/special/detail/2010/0905/、「無縁社会 新たなつながりを求めて」(2011年2月11日(金)午後7時30分~8時43分)などが挙げられる。http://www.nhk.or.jp/special/detail/2011/0211/

14) 『朝日新聞』(2010年12月26日~2011年7月31日)。http://www.asahi.com/special/kozo/ku/

店街のシャッター通り化、中山間地の限界集落化、若年人口の地域外への流出増など、「地縁」を形骸化する現状についてはすでに多くの指摘がなされてきた。このような地域社会環境の変化は現在も進行中である。さらに二度にわたる大きな震災の経験、近年の格差社会化の進行によって「無縁社会」不安は年齢層や地域などあらゆる境界を越えて広がっていく<sup>15)</sup>。このことは「孤独死」<sup>16)</sup>報道や研究動向においてもよく表れている。報道において「孤独死」という言葉が使われ始めたのは1970年代にさかのぼる<sup>17)</sup>。しかし、社会問題、研究課題という受け止め方は阪神・淡路大震災があった1995年頃からである。阪神淡路大震災の後、高齢者が従来の「血縁」「地縁」から引き離され、災害弱者となっている実態がクローズアップされたのである<sup>18)</sup>。同様の問題認識・関心は東日本大震災後の「絆」をキーワードとする多様な取組みにおいても観察された。生き残りをかけた助け合い、すなわち「縁＝援＝絆」が希薄な現実や救「縁」ニーズが、災害を機に、社会全体の問題として本格的に注目されるようになったといえよう<sup>19)</sup>。

無縁番組は、「無縁社会」に対する人々の漠然とした不安を「孤独死」の増加という現実を持って見える化し、「無縁社会」という言葉を全国区にするうえで決定的な役割を担った。ところで、NHKの「無縁社会」に関する一連の番組や『朝日新聞』の「孤族の国」シリーズなど、マスコミの「無縁社会」に対する報道姿勢について「ある種の危機意識に基づき」<sup>20)</sup>、「無縁化」状況を問題視する視座に傾倒しているという指摘も少なくない。斎藤（2011）は、無縁社会に関する番組放送、書籍化、サイト運営や他番組を巻き込んだキャンペーンなど、無縁社会をキーワードとするNHKの一連の動きについて、情緒的な取り上げ方であると批判する。島田（2011：21頁）も、「無縁社会」は戦後の近代化過程において「村落共同体」（地縁）、「家」（血縁）に代表される「有

15) 「阪神淡路大震災は災害救援ボランティアの未曾有の多さに1995年をボランティア元年とさえ言わしめたが、とりわけ2011年は、つながりと絆を再発見するコミュニティ元年とすべきだ」（牧里（2011）：1頁）と指摘する。震災を通して日本社会は、「地縁」の見直し、社会関係資本の抜本的な見直しを求められたのである。

16) 内閣府は、「孤独死」の確立した定義はないと断った上で「誰にも看取られることなく息引き取り、その後、相当期間放置されるような悲惨な死」を「孤立死（孤独死）」と定義する（内閣府（2010）：57頁）。

17) 『朝日新聞』（1970年4月16日付）の記事に「孤独死」という言葉が初登場し、以来、1984年までの間に「孤独死」を含む記事は25件に上る（小辻・小林（2011）：125頁）。

18) 小辻・小林（2011：126頁）は、震災後の仮設住宅（1995年～2000年1月）で233人、復興住宅（1995年～2003年）で190件と「孤独死」が集中して起こったことに注目し、都市部において散発的に「孤独死」が発生していた従来とは異なる被災地特有の状況が示されたと指摘する。コミュニティの崩壊・未形成のリスクを知らしめる、コミュニティの重要性を改めて認識させられた出来事といえよう。

19) 天災害の事例を通して形成された「無縁社会」「孤独死」に個人や社会の責任が問われにくい雰囲気は、その後のNHKの「無縁社会」喚起やそれを受け止める社会の反応にもそのまま踏襲されているように見受けられる。

20) 宮本（2012）：194頁。

縁社会」からの自由を選択した結果であるとし、「無縁社会」の闇の部分ばかりにフォーカスを置く一方的な取り上げ方に違和感を示す。「『無縁』ということがむしろ積極的に評価されていた時代があった」ことを思い起こせば、「無縁社会」は「本当に、否定し克服すべき対象」ではないのでは、と異なる視角からの考察の必要性を提起する。さらに社会構成員としての能動的な選択に対する責任の自覚をも促す<sup>21)</sup>。生涯にわたる能動的な選択が高齢期において活かされるためには公私にわたる自律性や備えが求められることを強調し注目を集めた「おひとりさまの老後」<sup>22)</sup>ブームでも同様の知見が認められる。

ただ、無縁番組は「無縁」化の背景にある構造不況に重点をおいている<sup>23)</sup>。また、「無縁」化を想定した準備の段階ではなく、すでに「無縁」化が進んでいる状態、すなわち結果の段階を取り挙げている。個別努力によって状況の変化が図られる段階ではもはやない。限定的な対象にスポットを当てた結果、偏向的なとらえ方にならざるを得なかったのであろう。「無縁」化を進めてきた結果についての責任は確かに当事者である社会構成員にあるかもしれない<sup>24)</sup>。しかし、誰もが能動的な選択が出来るとは限らず、そして経済危機のように社会構造的な影響が大きいことも否めない。したがって、NHKには、日本社会が「無縁社会」の闇に覆われるという将来不安のクローズアップに続く仕事として、社会構成員の能動的な選択、すなわち多様なライフコースが尊重される社会のあり方、将来展望についての問題提起が期待されていよう。

ところで、「社縁」は定年や解雇など退職を境にそのつながりのほとんどが解消されていく極めて時限性の高いものである。そしてそのことは入社時点からすでに明白であったはずだ。ただ、職住の分離、すなわちワークとライフの二元化によって従来包括的に行われていた役割の多くが分離、細分化されていった。そのうえ、職域での関係資本の比重が実態・意識の双方で肥大化していったのである。多くの知見にあるように、日本の伝統的な縁のしがらみからの自由を望んだ結果が地域コミュニティの形骸化、家族機能の外部化

21) 網野 (1996) が1978年に出版され学術書としては一般の読者から異例の注目を集めたことや、1976年に大ヒットした歌謡曲「東京砂漠」(内山田洋とクールファイブ)を例に、「砂漠から救い出されることを政治や行政に期待する声はそれほどあがらなかった。東京に生きる人々のあいだには、砂漠であることを認識したうえで、個人の力でオアシスを求めていく努力が必要だという自覚があった」と指摘する。

22) 上野 (2007: 213-260頁) は『遺品整理屋は見た!』や東京都監察医務院医師の講演録など様々な資料を手掛かりに「孤独死」に否定的な見方に再考を促す。さらに「安心して死ぬ」「おひとりさまの死に方5カ条」と題して、死後、自分や周囲が困らないための対応を生前にしておくことを提案する (258-260頁)。

23) 「NHK記者が語る、“無縁社会”の正体」。http://bizmakoto.jp/makoto/articles/1103/10/news030.html

24) 坂井は、家族に対する能動的な選択に注目し、戦後の家族モデルの瓦解による家族機能の縮小が家族構成員間の行動を個別化させ、さらには地域コミュニティの希薄化をもたらす要因となったと指摘する (坂井 (2012): 16-17頁)。

であり、「無縁社会」化も然り、強制的な拘束からの解放願望に起因するところが大きい<sup>25)</sup>。とはいえ、持続性に乏しい「社縁」に、従来の「血縁」「地縁」が担ってきた相互扶助機能の代替を期待するのはそもそも無理な話であろう。だからこそ、「社縁」から排除された女性たちが織成す「女縁」のような「選択縁」の可能性に期待が寄せられる<sup>26)</sup>。言い換えると、「従来型ではない縁を模索」し、「法律で規定される家族ではなく生活での関わりを基底におく『生活縁』」（嶋崎、(2011：23頁)）のようなものを検討するなど、「有縁」のあり方をめぐるパラダイム転換がいままさに求められている<sup>27)</sup>。

ここで、退職などによる「社縁」の断絶が起こりやすい高齢期の「無縁」化状況について、高齢社会白書（2013年版）の「孤立死」<sup>28)</sup>データを手がかりにみておきたい（内閣府（2013）：43-45頁）。東京都福祉保健局監察医務院が公表している「東京23区内で自宅で死亡した65歳以上一人暮らしの者」数をみると、2002年の1364名から2012年には2729名と、10年余りで倍増している。次に、（独）都市再生機構が運営管理する賃貸住宅約76万戸における単身居住者の「孤立死」（自殺や他殺を除く）をみると、1999年は全207人に対し高齢者は94人と半数以下であったが、2008年は全613人に対し426人と7割を占めるまでに激増している（内閣府（2010）：57-59頁）。さらに「単身死亡者で死亡から相当期間経過後（1週間を越えて）発見された件数（自殺や他殺を除く）」にしぼってみると（内閣府（2013）：45頁）、2002年が計154人のうち89人（57.8%）、2011年が200人のうち131人（65.5%）と、「孤立死」全体に占める高齢者の実数・比率とも急増が認められる。

この数字については、高齢人口の絶対的・相対的増加を考慮する必要があるだろう。各年10月1日現在の高齢人口の規模を高齢化率（実数）でみると、1999年が16.7%（2119万人）、2002年が18.5%（2363万人）、2008年が22.1%（2822万人）、そし

25) 内閣府の調査（2009年）をみると、「孤独死（誰にも看取られることなく、亡くなった後に発見される死）について、身近な問題だと感じるか」という問いに対し、総数では「あまり感じない」が36.1%、「まあまあ感じる」が26.3%、「まったく感じない」が19.7%、そして「非常に感じる」が16.6%であった。しかし、「あまりかわりをもたないから」近所付き合いを避けているという高齢者の場合は、前記問いに対して39.5%が「非常に感じる」とダントツに多い。「地縁」の希薄化に対する個人の考え、責任を想起させられる。

26) 上野（2008：9-11頁）は社会における性別役割分業の影響で「社縁」に取り込まれていない女性たちが導き出した「脱血縁・脱地縁・脱社縁」の新しい人間関係を「選択縁」と命名し、「有無を言わさぬ強制力を持っている」（同書：9頁）「血縁」、「地縁」に代わる現代的ニーズの高い関係資本と位置付ける。

27) 内閣府も、高齢期に社会的孤立が増加しやすい家族状況について、単身世帯の増加、晩婚化・非婚化を指摘しており（内閣府（2010）：55-56頁）、社会関係資本の柔軟な再編・創生が待たれるところである。

28) 「孤立死」については、「単身居住者が誰にも看取られることなく、賃貸住宅内で死亡」と定義づけをしている（内閣府（2010）：58頁）。

て2011年が23.3% (2,975万人) と急増が続いている<sup>29)</sup>。この変化からして上記調査にみるような「孤立死」全体に占める高齢人口比の増加傾向は想定内の結果ともいえる。そして今後も高齢率が増加するという人口予測と併せて考えると、今後も高齢者の「孤立死」が増加する可能性は高い。そして社会構成員の多数派を占める高齢者の問題はすなわち社会全体の問題として帰結していくのである。近年の「無縁社会」をめぐる議論が「孤独死」衝撃と一緒に展開されている状況を鑑みると、高齢社会の展望、百歳時代ロードマップを実現するうえで見過ごすことのできないデータといえよう<sup>30)</sup>。

ここで改めて「無縁」という言葉についてみておきたい。「無縁」はもともと仏教語であり、肯定的文脈で用いられる場合より、「助け・よるすべがない」がために「不本意にも行動上、不利益な制約を受ける」という否定的な文脈で使われることが圧倒的に多い<sup>31)</sup>。社会的動物である人間が社会のなかで「縁が全く『無い』」ことの証明が理論上不可能に近い<sup>32)</sup>という指摘の通り、近年の「無縁社会」議論も援助ネットワークの減少に問題認識をおく。すなわち社会において他者との協調的な関係を維持するネットワークの希薄化が進み、「無縁＝無援」状況へ、そして最もリスクな結果として「孤独死」が取り挙げられているのである。

ところで、「既存の縁から断ち切られた状態（無縁）は『苦』を伴うものであるが、それはまたその『苦』を契機として新たな関係が生まれる（結縁）可能性を孕むもの」（宮本、2011：194頁）でもある。「無縁」による厳しい状況は、それまでの社会関係資本（信頼や互酬性の規範、ネットワーク）<sup>33)</sup>を振返り、新たな社会的つながりを模索する転機となりうる。言い換えると、伝統的な社会関係に関する批判、「無縁」化過程を進めてきた当事者として自覚と責任の強調、そして「おひとりさまの老後」ブームなど、「無援社会」をめぐる議論や社会現象に通底しているものは新たな「縁」への期待ではなかろうか。伝統的な縁から解き放たれた個人には社会からの孤立や「孤独死」不安に苦しむ受け身の生き方をするのではなく、新たな縁のあり方を能動的に模索、創生していくことが問われている。アクティブな百歳時代の実現に向けたロードマップにおいて最も重要な要素といっても過言ではない。次章で述べる超高齢期の人々が保持する「有縁」状況からは、自らの居場所を確保・維持するうえで求められる自立志向や「縁活」現状を垣間見ることができる。また彼・彼女らの「選択縁」における「血縁」「地縁」「社縁」の活かされ方は興味深く、示唆に富むものである。

29) 内閣府「高齢社会白書」各年版（平成12年版；平成15年版；平成21年版；平成24年版）。

30) 無縁番組及びその反響が「孤独死」、すなわち「無縁仏」になる不安に集中していることから注目される社会現象である（島田（2011）：17-18頁）。

31) 肯定的な捉え方としては、世俗権力の干渉にとらわれない、仏道の理想として追求する価値を意味する仏教語として用いられ場合がある（網野（1996）：365-366頁）。

32) 山本・平松（2011）：79-80頁。

33) 稲葉（2011）：i頁。

### 3. 高齢期の「縁活」：インタビュー分析を通して

地域コミュニティの形骸化とともに家族の孤立がいつそう進むなか児童虐待、ひきこもり、家庭内暴力や介護殺人、そして「孤独死」など、「社会的孤立」に起因する諸問題が広い層を巻き込む深刻な社会問題として注目されている。高齢期は身体機能において相対的に劣位にあるうえに、現代日本社会における関係資本として最も比重の大きい「社縁」からも遠くに位置している。したがって、高齢期に孤立状況に陥った場合は、改善が図りにくいのが現状である。ライフステージの特徴から、新たな役割の獲得や「縁」を形成する機会にも相対的に乏しい。

このような認識は「平成22年高齢社会白書」でも確認できる。白書では「高齢者の社会的孤立と地域社会～「孤立」から「つながり」、そして「支え合い」へ～」という節を特設し（内閣府（2010）：52-72頁）、高齢層の孤立問題について社会的な喚起、社会構成員の改善努力を促している<sup>34)</sup>。社会的孤立<sup>35)</sup>に陥りやすい高齢者の特徴とその背景、社会的孤立から生ずる問題及び解決策について、多様な調査結果及び事例を用いながら解説を試みている<sup>36)</sup>。その際、「会話の頻度」「困ったときに頼れる人の有無」「近所や友人との付き合いの程度」からなる交流指標を用いて、「性・世帯構成」「健康状態」「婚姻状況」「暮らし向き」別の特徴に注目している（内閣府（2010）：52-53頁）。その結果として、「単身者、未婚者、暮らし向きが苦しい者、健康状態がよくない者が社会的に孤立しやすい」と指摘する<sup>37)</sup>。高齢者の社会的孤立の背景として、雇用労働者化及び家族機能・地域コミュニティ機能の外部サービス化、そして高齢者のみ世帯の増加を挙げる<sup>38)</sup>。言い換えると、地域社会を含む周囲とのかかわりを最小

34) NHKの無縁番組ディレクターの板垣（2010）氏のコラムが記載されていることからわかるように、この特集は無縁番組及び放送以降に「無縁社会」不安の広がりを受けるかたちで企画されたものと考えられる。

35) 内閣府は「家族や地域社会との交流が、客観的にみて著しく乏しい状態」を社会的孤立と見なす（2010：52頁）。

36) データとして、内閣府が実施した「高齢者の生活実態に関する調査」（2008年）、「高齢者の地域におけるライフスタイルに関する調査」（2009年）、「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」（2008年）等の調査結果が用いられた（内閣府（2010）：52-63頁）。

37) 事実、全国の60歳以上の男女を対象とする「高齢者の健康に関する意識調査」（内閣府、平成24年度）の結果をみると（内閣府（2013）：45頁）、「孤独死」（誰にも看取られることなく亡くなったあとに発見される死）を身近な問題と感じるものの割合（「とても感じる」「まあ感じる」を合わせた値）は、単身世帯が45.4%、夫婦二人世帯14.6%、それ他が12.4%となっている。単身世帯者に「孤独死」不安が圧倒的に高く、なかでも「一人暮らしの男性」は「人との交流が少ない」、「頼れる人がいない」で高率を示しており注目される（同前：41-42頁）。

38) 加えて未婚率・離婚率の上昇、外部サービスの充実による生活の利便性の増加、社会経済

限にとどめ会社人間として生きてきた結果が、「社縁」から切り離された高齢期に表面化しやすいということである。外部化が進む諸サービスへのアプローチが困難になる一方で、さらにメッセージ発信や情報受信の機会にも乏しい<sup>39)</sup>高齢期の特徴がよく表れている。たとえつながりを求める高齢者からの能動的な発信や周囲の気付きがあった場合でも、相互に届きにくい状況が繰り返され、結果的に孤立に陥っていく様子を物語っていよう。

さらに、高齢期の社会的孤立による具体的な問題として「孤立死」に言及し、「生存中の孤立状態が死によって表面化したものとして捉え、生きている間の孤立状態への対応を迫る問題として受け止めることが必要」（内閣府、2010：59頁）と力説している。社会的孤立及び「孤独死」についてライフコースを包括的に捉えた視座に立っていることがわかる。ただ、上記の検討項目は健康や世帯構成、経済状況など高齢者の個人的要因に関する検討にとどまっている。個々の多様なライフコースを補強する社会的基盤との連携を含めた俯瞰的展望が求められる。

以上の状況を踏まえて本章では、筆者が実施したインタビュー調査の結果を用いて、超高齢期の社会活動、「縁活」について分析する。社会的に孤立しやいと危惧される超高齢期を生きる彼・彼女らがどのような「縁活」を展開しているのか、その特徴及び背景について考察する。

### 3-1 調査の概要

次節で使用する資料は、山口県、福岡県、兵庫県に在住する超高齢者を対象に筆者が実施したインタビュー調査の結果である<sup>40)</sup>。調査期間は2012年4月から2013年10月である。インフォーマル・インタビュー（非指示的面接法）の方法により、生活史、健康状態、健康生活、社会活動、そして長寿認識などを中心に調査参加者（以下、参加者）に自由に語ってもらった。ただ、本人との意思疎通が困難だった1ケースについては同居の長男夫婦から話を伺った。インタビュー場所は、12ケースが参加者の自宅・居住施設であり、1ケースが自宅（1回目）と公共の施設（2回目）である。インタビューには、筆者と研究補助者1～3名が同行し、調査の記録のために、ビデオ・カメラとICレコーダーによる録画・録音を行った<sup>41)</sup>。

85歳以上の方で1～2時間に及ぶインタビューに応じていただくという健康面での制約もあり、参加者への依頼は、筆者の知人からの紹介、参加者から紹介してもらった雪だるま式に

的境遇を挙げている（上掲書：55頁）。

39) 情報の送受信の仕方が激変し続けていることも高齢者の情報活用を困難にしていることは言うまでもない。

40) 本調査の実施に当たっては、山口県立大学の調査倫理委員会の承認を得ている。調査参加者の方にも事前に説明を行い調査協力について承諾を得ていることを明記しておく。

41) 調査参加者一人からは撮影の許諾が得られず、音声の録音だけを行った。

行った。サンプリングの観点からは非常に偏っており、本調査結果を一般化することは困難かもしれない。しかし、13人の超高齢者の語りは、高齢期の「有縁」状況及び「縁活」の実態を雄弁に語るものであった。高齢者と社会とのつながりがもつ多様性やあり方、QOLの向上への影響を考えるうえで貴重な示唆を与えてくれるものばかりであった。

以下、インタビュー内容を随時引用しながら<sup>42)</sup>、参加者の「有縁・無縁」の実態並びに「縁活」状況についてみていく。社会とのつながりについては「血縁」「地縁」「職縁」<sup>43)</sup>と併せて、「選択縁」<sup>44)</sup>について検討する。本稿では、前記3つの伝統的な関係資本のカテゴリーでは収まりきれない、「任意の選択により形成されたあらゆるつながり」(社会サービス利用による関係を含む)の総称として「選択縁」を用いる。

### 3-2 しなやかな「縁活」と「選択縁」

本調査に参加した85歳から103歳までの13人の社会人口的特性をみると(表1)、世帯類型は単身世帯が5人と最も多い。一般的に聴力の低下が認められるものの、総じて健康水準は良好である。家事能力を持ち実践している人も多かった。本調査では個別の経済状況に関する詳述は求めておらず暮らし向きを客観的に判断することは難しい。推測の域を超えないものではあるが、インタビュー時の全般的な状況から判断して、参加者の暮らし向きはおおむね普通以上の、ややゆとりがある水準のように見受けられる。内閣府が指摘した「家族や地域社会との交流が、客観的にみて著しく乏しい」社会的孤立に陥りやすい「単身世帯、未婚者・離別者、暮らし向きが苦しい者、健康状態がよくない者」(内閣府(2010):52-55頁)という高齢者の特徴のうち、暮らし向きと健康状態を除く他の条件にはおおむね当てはまるものと考えられる。

42) 引用文のなかの〔 〕内の内容は、筆者による補足である。

43) 85歳以上という年齢からして「社縁」を新たに形成・維持しているケースは少ないと考える。また、「社縁」とは相対的に縁の薄い女性や自営業者、さらには退職後に新たな「職縁」を形成している場合をも含むことばとして、本節では「社縁」より広義の「職縁」を用いる。

44) 上野(2011)は、「選択縁」の特徴として伝統的な3つの縁と違って「互いが納得して選り合う他人同士の関係」であり、「加入脱退が自由で、強制力がなく、包括的コミットメントを要求しない」関係であるとし、より現実的な縁として提唱している(「選択縁の社会—家族持ちから人持ちへ」『朝日カルチャーセンター・朝日JTB文化交流塾中之島教室』(2011年12月5日))。 <http://www.asahiculture.com/LES/detail.asp?CNO=132367&>

表1 研究参加者の年齢・性別構成及び身体機能

	性別	年齢*	世帯類型	身体機能**	食事準備能力；備考
A	女性	103歳	単身	視力(O)、聴力(O)、歩行(O)	○；ホームヘルプサービス
B	女性	101歳	施設	視力(Δ)、聴力(Δ)、歩行(X)	×；車椅子使用
C	男性	100歳	単身	視力(O)、聴力(Δ)、歩行(O)	Δ；ホームヘルプサービス
D	女性	103歳***	息子夫婦同居	視力(O)、聴力(X)、歩行(Δ)	×；歩行器使用；デイサービス
E	女性	90歳	施設	視力(O)、聴力(O)、歩行(O)	○
F	女性	95歳	息子同居	視力(O)、聴力(O)、歩行(O)	◎；入浴支援(息子)
G	女性	92歳	単身	視力(O)、聴力(O)、歩行(O)	◎
H	女性	86歳	単身	視力(Δ)、聴力(Δ)、歩行(O)	◎
I	男性	91歳	夫婦	視力(O)、聴力(O)、歩行(O)	○；息子夫婦隣居
J	男性	86歳	夫婦	視力(O)、聴力(Δ)、歩行(O)	Δ；息子夫婦隣居
K	女性	85歳	単身	視力(O)、聴力(O)、歩行(O)	◎
L	女性	91歳	息子同居	視力(O)、聴力(Δ)、歩行(O)	◎；デイサービス
M	女性	95歳	娘家族同居	視力(O)、聴力(O)、歩行(O)	Δ；4世代同居、デイサービス

\*：第1回調査時の年齢である。

\*\*：身体機能については、視力、聴力、歩行力について、「ほぼ正常」(O)、「問題はあるがなんとかできる」(Δ)、「まったくできない」(X)に区分した。食事の準備については、上記区分に加え、「ほぼ正常、かつ日常的に実践している」場合を(◎)で示した。

\*\*\*：約2年前から身体・認知機能の低下が認められ、意思疎通が困難な時が多いとのことであった。そのため、同居の長男夫婦から話を伺った。

参加者の「血縁」の現状を形式面からみていくと、全員が既婚者であった。2人を除く11人は配偶者と死別しており、現在の主な「血縁」は子世代である。13人のうち子どものいない2人の場合も、非日常的ではあるものの、親戚との間での交流が行われていた。施設に入所している2人を含む11人の場合、子どもやその家族との間で日常的、あるいは定期的な交流が行われていた。

孤立傾向が表れやすいとされる単身世帯であるが、本調査結果は異なる様子を示す。全5例のうち2例は子世代が車で30分程度の距離に住んでいる上に、困った時の相談・対応が可能な関係を保持していた。単身世帯の割合が高いものの、参加者の「有縁」状況からは「家族持ち」ではなく「人持ち」<sup>45)</sup>の「縁活」が特徴的に観察で

45) これはまさに上野のいう「選択縁の社会— 家族持ちから人持ちへ」の代表例として考え

きた。以下の例にみるように、子世代との交流が困難な状況でも「職縁」、「地縁」、「そ

して「個人の顔で出て」（上野（2008）：9頁）いく「選択縁」が活かされていることが注目される。

表2 参加者の現在のつながりの状況

(単位：人)

「血縁」*		「地縁」		「職縁」		「選択縁」			
		町内会・近所付き合い等				趣味・学校・ボランティア等		社会サービス	
①	②	あり	なし	あり	なし	あり	なし	あり	なし
11	2	4	9	5	8	11	2	7	6

\* ①日常的なつながりあり、②年中行事や必要時のつながりあり。

[弟子歴が] 一番長い人で38年。あとは大抵20年は来てんの。……ここ4年間ほど、1日もかかさずごみの始末してくれる。……朝ね5時に起きたら散歩がてらここまで来る、向かい側なもんだからね……朝早くには新聞ここまでポストへ入れてくれる、郵便物きてあったら、みなちゃんこっちへ。もうね、ほーんとに、わが手足よりもまだあるぐらいね、あの、ほんまによくみな、うちの弟子たちはみなよろしてくれますよ。……ちょこちょこはね、あの書道の人たちは相変わらず来てくれます。あの、書いても書かなくても、みんな集まるのはいいゆうてね、みんな集まってね、何も書かないでね、お弁当持ってきてここで。(Aさん)

[「こっちは婆さんでね、はな、おいでもおもしろくないでしょうに、よくおいでて下さってね」というHさんのお話に対して] いや、いろんなこと、生活の知恵をもらってますから……すごくて、ためになる話が多いです。……特にあの、お料理の作り方とか……この前は春菊、春菊のこう芽がいっぱい出たのちょっと間引いてくださって……。 (近所づきあいをしている40代の女性)

歳のせいかな、部屋の暗さは電力会社の節電のせいかな、なんて思ってた、東京のムスコモドキが、知らない間に、……病院の先生と段取りを組んでくれて、診察は〇月〇日、手術は何日、入院は何日間、私はそれに乗っかればいい、ってしてくれまして……。 (Cさん)

長期にわたって交流が続いている「選択縁」が彼・彼女らの日常を支え、周りにも影

響を及ぼしている様子が伝わってくる。交流内容を見ると、家庭菜園の野菜のおすそ分けや新聞や郵便物の取り込み、ゴミ出しなど、大きな負担感を伴わないと思われるかもしれないが続けることは大変であろう。また、受け手のニーズ及び満足度が極めて高い支援といえよう。まさに「遠くの親戚より近くの他人」の有効性を裏付けるような事例である。Cさんの事例には、高齢者や周囲の保健・医療への態度・知識が健康長寿に大きな影響を及ぼすことがよく表れている。健康情報へのアクセスが困難だったり、一人だから異常に気付きにくかったり、面倒だから受診を見送ったり、さらには老化現象と片づけられたりと、病気の発見も管理も難しい。特にCさんのような白寿者となると健康長寿の実現に周囲の関心は絶大的であろう<sup>46)</sup>。

「職縁」についてみると、元職場の同僚と定期的な集まりを続けているJさん、電話や訪問を頻繁に受けているBさん、そしてAさん、Cさん、Fさんは仕事が忙しくて「死んでる暇もない」<sup>47)</sup>という現役である。なかでもサービス業に従事しているFさんの場合、お客様とのやりとり、商品の計算や仕入れなど仕事の楽しさを熱く語っていた。彼女の話からは仕事から得る充実感や生きがいが高めて長寿意欲を高めている様子も見受けられた。

今とにかく〔書を〕十ぐらい頼まれものある、ははは、うん。ほんでね、今度今表札も頼まれて、表札ね。……〔書道教室に〕水曜日の人が6人また来ますね。……土曜日6人来て、それから月にいっぺんぐらい自分の都合のいい日に私も良かった日に来るのが2人いますね。……あ、それから3人またこの頃増えたのよ、ははは。(Aさん)

おばちゃん、合格したよって御礼に来てんじゃが。……多いですねえ。実に多い。「おばあちゃん元気かね？」って。「元気よ」って。……「おばあちゃんが95でいね。料理も……計算も出来るんよ」って言うてくれて。はい、みんな寄ってくれていね。……〔何歳まで生きたいかは〕そりゃあ今、自分でも考えてない。はい。まあ生きたらええな。……まあ仏様次第。まあはよ来いよち言うちよったら行かにならん。(Fさん)

生活の自立という側面では、参加者が外部サービスを効率よく利用している点が注目された。外部サービスを利用することで、参加者は健康水準が低下した状態でも自立的な生活が続けることができ、家族も支援の負担を軽減してもらった効果を得ていた。一人暮らしの百寿者であるA、Cさんの場合、家の掃除や簡単な食事の準備などにホームヘルプサービスを利用してはいるものの、サービス提供を最小限に止めてもらい、自活を心がけてい

46) 高齢者の場合、同じ疾患、病態でも状態の発現や予後に環境要因(対人関係、経済状況など)が大きな影響を及ぼすとされる(金(2013):47頁より再掲)。

47) Cさんの場合、原稿の執筆のために「構想を練ったり、歌の言葉を考えるだけでも頭働 きっぱなしですよ。死んでる暇もないんですわ」という多忙ぶりである(にっち倶楽部(2011):10頁)。

た。他にも、周りに心配をかけないために自分の身の回りの世話に外部サービスを上手に取り入れている事例があった。外部サービスは、依存的生活に陥るリスクを低下させる予防的役割を担っていると見受けられる。

ヘルパーさんに夕飯のことだけしてもらうようにね、そうなの、自分でね、自分であの、洗濯からね、お風呂に入るのからみな自分でやってるのよ。ほんでヘルパーさんが来たらね、お風呂だけ一緒に入りましょって。一緒になんか入らんから、髪洗う時だけあんな呼ぶから来てゆうてね、髪洗う時だけヘルパーさん呼ぶの。したらもう髪洗ってくれるからな、そしたらあとはもう自分でやってね、何もあの、食事してもらうのも今のとこやめてもらってんのよ。(Aさん)

あの、ヘルパーさんがね、日曜以外は毎日来てくれますが、1時間程度、……まあ、お昼のことはしてくれるのがふつうみたいな感じ。だから、朝とか夜とか、その時分で整えなきゃいけない。……若い時に苦学生だったでしょう。自炊もしてますよ、だからそこ〔台所〕へ立つことが全然苦にならない。100歳になっても。それで助かってます。若い頃の苦労は買うてでもせえよと言うけどももう、よう苦勞させといもらったな一と思います。うん、料理ができなきゃね、便利なものありますよ、チンするか、湯煎するか、それからフリーズドライなんていうのもお湯でしたらそのまま食べられるじゃないですか。いや、フリーズドライっての便利ですよ、あれは。結構おいしいし。(Cさん)

うちで、寒いから洗えないの。一人でしょう？もし頭洗う時、倒れたらいけんからね、それで、洗ってもらえて子どもが言うからね、向こう〔美容院〕で洗ってもらってる。トリートメントちゃんとしてもらってねえ。(Gさん)

参加者の現在の「縁活」の内容に着目すると、趣味活動に関するものももっとも多かった。本稿では、「血縁」「地縁」「職縁」の他に、趣味活動や社会サービスの利用など、参加者の社会とのつながりを「選択縁」としてまとめた。高齢になるにつれ「地縁」「職縁」が希薄になりやすい。以下の語りには、趣味での他者とのつながりから新たな刺激を得る、生きがいへと発展していく様子がよく表れている。趣味活動を中心とする「選択縁」が、日常生活において直接の支援源にはなりにくいかも知れない。しかし、社会的孤立を防ぐ、社会的孤立に起因する問題群を予防する効果があることは改めて強調するまでもないだろう。参加者の場合も、生きがいを保持しながらQOLの高い日常を過ごすうえで趣味活動の果たす役割は非常に大きいと見受けられる。趣味には本人が高齢期以前から取り組んできたものの他に、デイサービや自治体の公開講座や講習会を契機に始まった活動も少なくなかった。そして、高齢期における新たな趣味世界へのアプローチは、家族をはじ

めとする周りの人々のサポートや受け止め方に左右されやすいことが、参加者の事例からも観察された。

今、歌、歌、短歌の会なんか入ってんですよね。……みんなね、100歳、104歳、105歳<sup>48)</sup>ゆうても本気にしないで、私を褒めてな、そして若う言うてくれるってな、歌いっぱい作る。そしたらそれ、みんな喜んじやって、それがいつも載るのよ。……うん、だけどもね、あはは、まあね、この年になって喜びいうたらそんなとこよそれ。……異性の友達ゆうのもいいものよ、うん。ばばあになるとな、そうゆうこと、みんななくなったと思ってるけど、うん、そうなのよ。そんでね、やっぱり男性の人との話の内容も違ったりする、……顔見ない人でお友達がいっぱい出てきてんのよ。(Aさん)

年寄りが一人で住んじよるよりもね、あの一、友達ができるかと思って〔施設に〕入ったんですよ、ね。……ここもね、月曜、火曜、水曜と、決まって、ここへ集まって遊ぶからね、遊ぼうやで、遊ぶけえね。や、みんな喜んでよ。うちにおって、だまーってここの守して、おもしろくないけどここへ来たなら楽しいってみな言うてくれるからね。(Eさん)

〔温泉には〕あの一、息子がね、お昼休みに、昼の休憩に連れてって来て、3時のお休みの時に、ね、あの、迎えに来てくれますよ。……う～ん、あのねデイケアは、わり方楽しいです。あーそれがね、……私コーラスへね3年通いましたから、……あの、歌うの。いろんな歌を。デイケアで。(Lさん)

もう、90の坂を越えたらねえ、も、やっぱし、段々もう、お友達が無いもの。はあはあ。段々ねえ、少なく。まあ、今この俳句と詩吟のお友達がねえ、あれで。(Gさん)

〔昔の詩吟仲間から〕電話かかってくるんですよ、まだお元気ですかとか、そやけど、あの耳が遠いから、遊びに来てね、話ができんってことは、やっぱちょっと足が遠なるわね。それと、もう年やからね、電話してひよっと死んどりやせんやろかみたいなね、そういう、そういうあれがあるからもう今は……今ね、デイサービスが楽しいっしょか。最初のうちはね、ああデイサービスに行ったら大丈夫かなって思ったら、楽しいんですよ。うん。今度はいつか？この次はいつか？って。……やっぱ100何歳でしょう？みんなが大事にして、ようしてくれるんですよ。したら、気に入ってね。……じゃけ、あの、喜んで今行きますもんね。……デイサービスが一番今関心…ですね。おお、新しい刺激なんですね。(Dさんの長男)

3か月で〔自治体を実施した〕研修が終わった時に、これをそのままやめてしもうたらもった

48) Aさんは、第2回目のインタビュー時に105歳であった。

いないから、わしらで継続してまたやらんか、ちゅうことになってね、それであのお達者クラブちゅうのができたわけで……、今まああれが6年ぐらい続けてますがねえ。誕生日のお祝いはねえ、カラオケでやるんです。」 (Jさん)

在宅と施設、社会サービスと家族支援など二元論的、縦割りに境界づけやすい選択肢を上手にコラボし、活用している。趣味活動では、年齢相応の役割を期待されやすい家族関係や地域コミュニティ活動のなかではなかなか想像しにくい横のつながりが形成できる。異なる考えや多様な生き方と出会い、好きな領域を発見し夢中になれることは日常にはりあいをもたせる趣味活動ならではの長所といえる。超高齢者の場合、パートナーを含む家族、友人・知人との死別を経験する確率が相対的に高く、健康水準の低下も避けられない。場合によっては、周囲との意思疎通や外出、社会活動にも支障が生じる。そうした状況では、それまでの支援関係の再構築が必要となる。現に本調査でも参加者の13人のうち11人が死別を経験している。それらの転機をどのように受け止め、新たなネットワークを形成・保持するためにどのような心がけ、能動的な「縁活」を展開していくか、参加者の知恵や行動力から得る示唆は計り知れないものがある。

さらにいずれの参加者も非常に自律的な生活姿勢を示していることが注目される。ホームヘルパーからの支援に対しても本当に必要な部分だけに止めておく、人生にはりあいをもたせるために趣味活動や地域活動に励んだり施設暮らしを積極的に選択したりと、主体的に取り組んでいる。参加者の自律性をよく表している事例をもうひとつ、現在施設で生活しているBさんのインタビュー記事からみておきたい。

入居を決めるときは、自分で決めたの。とにかく、人間はいつまで生きられるかわからないでしょ。平均寿命くらいまでで……、と書いていても、そうはいかない。そうなると、どいてやるほうが、息子も私も自由にいろんな事ができる、と書いて自分で決めたの。息子に話したら、ビックリしてた。でも、どちらのためにも、気持ちよくお互いを生かしていきたい、という私の思いをわかってくれて、息子は、私がそう決めたんならそれがいいと言ってくれた。……自分のことは何でも自分でしたい。だが、身体を自由に使えなくなったら、その部分だけ、手助けしてもらおう。そうすれば、いろいろできることがある。(Bさん) 49)

障害を抱える自分を甘やかすことなく、世間体や家族扶養規範にとらわれず、客観的で先を見据えた冷徹な状況判断のもとに、親子双方の生き方を尊重できる選択肢を選んでいく。双方のQOL向上に向けての自律的な生活姿勢が目立つ。Bさんの場合、近くに住む息子さんが毎週施設を訪れ日常的な支援を行っている。Bさんが自身の選択や現在の環境について後悔をせず、双方が満足する関係が現在まで持続できているのは、Bさんの自

49) にっち倶楽部 (2010.12) : 10頁。

律的な判断とそれを家族が尊重するという決定過程があったからであろう。超高齢期の自律性については、次のAさんの文章からもうかがうことができる。

そういうもの〔健康長寿〕に秘訣なんてあるのかしら？ 私は百歳の頃は両足で階段を上ることが出来なかった。然し現在百三歳になってからは、両足を交互に動かして、トントンと二階に上ることが出来るようになった。これは専ら必要にせまられて訓練したお陰である。人間、高齢になると、その高齢に甘えたくなるものだ。この年なんだもの、これくらいのこと、人にして貰って当然だろう、なんて思いたくなるのだ。優しい人達は皆手を貸して下さる。これが習慣となってゆくうち自力では何も出来なくなってゆくのだ。年はとつてもやる気があれば病人でない限り大ていやれるものだ。不完全でも。少々無理でも自分の手足を小まめに使っていると、かなり長持ちするものだ、と私は自分の体験からそう信じ、今幸せな百三歳を元気で生きている。(Aさん) 50)

高齢を理由に生活自立をあきらめない、人の親切に甘えないことが健康長寿、自分らしい生き方につながるという百寿者からの教えである。不自由な部分だけを依存すればよいとする生活自立への徹底ぶりが、自らの生活における自律性を失わない砦となっていよう。超高齢者の自立を妨げるような支援はしないという心がけは家族や周囲の人にも求められよう。食事の準備を含む家事全般についてみると(表1)、5人が家事全般を直接行っている。在宅でホームヘルプサービスを利用している2人と施設居住者2人、そして夫婦・同居世帯の4人の計8人が家事支援を受けていた。このうち、施設に居住する一人及び在宅の3人は直接料理をすることも少なくないという。一人暮らしの有効性を力説するかのような次のAさんのお話のように、何らかの健康障害を抱える場合でも、一人暮らしが可能であれば続けることが自活能力の保持に良い影響を及ぼすようだ。完全自立や依存を迫るものではなく、出来ない部分をサポートするレベルで社会サービスが上手に取り入れられている。だからこそ、超高齢にもかかわらず参加者の家事能力が一定レベル保持できているのであろう。

健康の秘訣とは何かということになるのだが、私自身にもよく分らない。……私はよく動く。一日に数十回、いやそれ以上。何と言っても“おひとり様”だから、動かないでは美味しいご飯にもありつけない。炊事、洗濯、掃除など、よい運動だと思う。……買い物に行く、料理を作る。これは自分が好きなものを作るのだから、結構楽しい作業だ。洗濯などは洗濯機がやってくれるから何のこともない。百歳老人でも安々とやれる仕事だ。(Aさん) 51)

50) にっち倶楽部 (2011.9) : 60頁。

51) にっち倶楽部 (2010.6) : 53頁。

ただ超高齢者の自活が、健康生活習慣の維持・改善や緊急事態にも安心できる支援体制があつてこそ成立、持続できる点も忘れてはならない。

健康生活にも参加者の自律的態度や社会サービスの効率的な利用実態が観察できた。栄養機能食品の利用、乾布摩擦、規則的な運動（デイサービスのプログラムを含む）、テレビから得た知識を基に考案した自己流のマッサージ法など、健康生活への関心が非常に高く、実践に関しても並々ならぬ行動力、持続力を持っていた。健康情報を日々の生活に取り入れ、長期にわたって習慣化してきたものがほとんどであり、自己の健康生活に確信を持っていた。生活面での自立や健康長寿のための心がけ、能動的な実践のために徹底した自己管理を努めている様子が見え（52）。このような自律性は、社会サービスを利用においてはもちろんのこと、子世代からの支援を受ける態度にもよく表れていた。

たいい嫁さんの悪口いうけど、わたしあ運がよくて、ええ嫁さんもうて助かってます。まあそれでまあ接触する時間が短い関係もありますけどねえ。女房とも仲がええです。……息子と結婚してもうて30年くらいになるでしょうがね、もう30年になる。……夕食だけ一緒に食べますよ。……贅沢は言わん、できたものを食べちよる。それに文句言うちゃあいけんからねえ。……食べることは一切、一切若い者んがつくったものを食べる。……まあ若い者が食べるものを、じゃけえ肉やなんか多少若いもんは多いですけど、そんなときにやまあちよつと控えめに食べときゃあいいね。えへへ。揚げ物やつぱり割となんしますけどね。やっぱり嫁も考えてあんまり頻繁に揚げ物をしませんから。嫁らあも多少考えてやるんでしょ。年寄と一緒にじゃから。（Jさん）

あれ〔嫁〕の手をなるべくとらんように、っていうのに一生懸命です。そうは言うてもね、入院したりすれば、あれを持ってきてくれ、これを持ってきてくれて手はとりますよ。ま、頼む、それもね、商売しちよるから、手が、ねえ、店昼間やちよつて、店を閉めて、店を閉めては来るのよね。（Hさん）

〔お風呂は〕自分で入りますよ。それくらいできんじゃ。ちゃんとドアあけて入るまで〔息子が〕見ちよつて。あがるよーって言ったら今度は来て背中流してくれる。で、またあがるよーって言ったら今度はゆあげを持って来てくれる。……いや、「あんたすまんね」つち言うたら「育ててもらった恩があるから」って、これくらいのことはせんといけんって。（Fさん）

52) 権藤（2007）は百寿者について、高齢層全体に比べ相対的に学歴・学力が高いと指摘するが、本調査の参加者にも類似傾向が観察された。学習意欲の高さは健康生活に関する学習・実践活動でも発揮され、自らの健康生活に確信を持っているケースが多く観察された。

……あの、まあ人にもよるけどね、年取ったらもうやらないでもいい、すがって、すがってとにかくやってもらえることはみーんなやってもらわなきゃ損だっという感じの人が多いいじゃないですか。でも私、うん、私ね、やれることは、なんでもすすんでやって、体を動かして、外へ出て、…だからあの、公園の掃除なんかがありますけど、当番でなくても、……病気で出られなきゃあれですけど、体が動いてうちでしたら……、当番でなくてもずーっと出てます。そうですね。だから、あの頼るのあんまり好きでないです。……やれば、体が動けば、皆さんの役に立つのなら、やりたいと思う。(Kさん)

支援の授受関係に目を向けると、自分の好みや扶養規範を主張するのではなく、支援に取り組む相手の努力や支援内容を肯定的に受け止め、礼を述べる姿勢が印象的である。家族だからという甘えを許さず、当たり前のように相手の生活リズムを先に考え、尊重しようと心がけていた。地域活動に関しても当番だから、義務だから、歳だから、といった認識は見当たらない。自分のため、さらにコミュニティの役に立ちたいという心構えで臨んでいるから社会参加がしやすく、持続できているものと見受けられる。

参加者の「縁活」の特徴を包括的に捉えるために、活動の関係者及び内容別にまとめた(表3)。斎藤(2012:547頁)に倣って、活動において「主に接する人」別に「個人型」「自分」「家族型」「自

表3 「縁活」の内容と他者とのかかわり方

	性別		世帯類型			
	男性	女性	単身	夫婦	同居	施設
計	3	10	5	1	5	2
<b>他者との関わり</b>						
個人型	0	0	0	0	0	0
家族型	0	0	0	0	0	0
集団型	1	1	2	0	0	0
混合型	2	9	2	1	6	2
<b>活動内容 (M.A.)</b>						
個人活動(趣味・健康管理)	3	6	5	1	2	1
社会参加・奉仕活動	3	2	2	1	2	0
学習活動	1	2	1	0	2	0
仕事	1	2	2	0	1	0
社会サービス利用	1	6	2	0	3	2

分」と「家族」の組み合わせ)、③「集団型」(主に家族以外の人)、④「混合型」(①から③と重複しない、「家族以外の人」と「自分」、「家族」の組み合わせ)に区分した。「個人型」「家族型」の該当者が皆無であり、家族のいる参加者を含む全員が社会との何らかの接点を持つ活動を行っている。例えば、子どものいない2名は「職縁」と社会サービスを活用した「集団型」の「縁活」で社会とつながっている。家族同居や施設在住の場合も、特定のつながりに偏らない「混合型」の「縁活」を展開している。すでに指摘したように、社会サービスの利用や「選択縁」の活性化によるところが大きいと考える。

つぎに、活動内容を「個人活動」、「社会参加・奉仕活動」、「学習活動」、「仕事」の4区分<sup>53)</sup>に「社会サービス」を併せて見てみると、個人(趣味)活動と社会サービスの利用が圧倒的に多い。参加者に共通してみられた特徴として、子世代が超高齢者に様々な活動参加のきっかけを提供したり、趣味活動や社会サービスプログラムが契機となったりと、社会と新たな接点を形成する機会に恵まれている点も注目される。

以上、85歳以上の超高齢者の「縁活」状況のみてきた。日本の伝統的な社会関係資本とされる「血縁」「地縁」「職縁」に加え、趣味・学習活動や社会サービスの利用など「選択縁」が活性化している点が注目された。そのため世帯類型別による目立った差異がみられず、ほとんどの参加者が多様な人との接点を持ちながら「縁活」を展開している。彼・彼女らは、伝統的な「縁」を多様な「選択縁」と組み合わせ、能動的な「縁活」を行っていた。「血縁」「地縁」「職縁」のある特定の縁が乏しい環境であっても、他の縁との組み合わせや「選択縁」によって必要な支援が得られていた。さらにいずれの側面においても参加者の自律的な生活姿勢が注目された。そのことが健康状態や生活環境に左右されない能動的な「縁活」を続けさせ、さらには健康長寿を可能にしていると考えられる。

## 5. おわりに

本稿では、アクティブな大衆長寿時代の実現を目指す「百歳時代ロードマップ」の観点から超高齢期の「有縁」のあり方について検討した。具体的には、まず、深刻な社会問題として注目されている「無縁社会」談論について考察し、ついで、超高齢者の「有縁」実態及び「縁活」に関する事例分析を行った。

「血縁」「地縁」「社縁」は日本の伝統的なつながりとされてきたが、「血縁」「地

<sup>53)</sup> 本稿では、岡本(2012:6頁)の4区分に加え、多くの参加者が利用している社会活動として「社会サービス」を加えた。

縁」の形骸化、そして大きな比重を占めていた「社縁」の希薄化が進行している。それによって、社会的に孤立する人の量的増加及び対象範囲の拡大が観察されている。生命維持にかかわるような緊急かつ重大な支援ニーズに対しても、地域コミュニティはおろか家族も把握できていないような事態も続出し、深刻な社会問題として懸念されるまでに至った。

「無縁社会」恐怖は、「社縁」からの断絶、健康状態の低下、社会的役割の縮小が起りやすい高齢期の長期化に対する不安とともに増殖する様相を呈している。このような「無縁社会」現象については、現代日本社会の危機的状況とする認識のもと、伝統的なつながりの崩壊に原因を求める意見が支配的である。

現在の問題状況に着目した上記の見方に対し、学界からは「無縁社会」化の過程や将来展望に主眼を置く見方が多かった。「無縁社会」の肯定的な側面にもフォーカスを当てる必要があること、並びに戦後の近代化過程のなかで従来の「有縁」を拒み今日の「無縁社会」を作った当事者としての内省と責任の自覚が提起されている。伝統的な「有縁＝有援」の希薄化に関しては共通認識を有するが、その解釈（原因や評価）及び今後の展望をめぐっては異なる見解を示している。

インタビュー調査の参加者（85歳以上）の「縁活」実態に注目してみると、伝統的な「血縁」「地縁」「職縁」が組み合わされ、緊密に補完し合う関係にあった。そこに能動的な「縁活」（趣味活動や社会サービス、学習活動など）を通して新たに形成された多様な「選択縁」が加わり、強い拘束がなく日常に張り合いを持たせる「有縁」状況を呈していた。そのため、現在の「有縁」状況に参加者の年齢や性別、世帯類型による大きな差異が認められなかった。健康上の問題を抱えながらも能動的に「縁活」を行っていること、参加者の属性別の差異が少ないという結果からは、アクティブな百歳時代ロードマップの実現に向けて重要な示唆を得ることができよう。本調査は対象事例数が少なく分析結果を一般化しにくいことは否めない。しかし、高齢期における「有縁」状況及び社会活動の特徴と可能性、特にライフコースの多様性が考慮された「縁活」、「縁」の有機的な連携による相乗効果が確認できた。健康長寿のロールモデルが示す貴重な実践例といえよう。

以上、「無縁社会」をめぐる議論、超高齢者の「有縁」及び「縁活」事例の考察を通して次の点を指摘しておきたい。まず、「無縁社会」問題をネットワークの「崩壊」ではなく「変化」として捉える必要性があろう。そのために「無縁」化過程に関する内省、「有縁」現状、多様な「縁」の有機的な連携、そして自律的な個人が織りなす「縁活」や「選択縁」の有効性へと視野を広げていくことが求められよう。インタビュー事例では、自律的な「縁活」や「選択縁」によって個別属性による差異が最小限に止められていた。健康長寿を達成するロードマップ、すなわちアクティブな百歳時代への可能性を示唆する、見過ごしてはならないメッセージであると考え。NHKの番組に端を発して広まった「無縁社会」「孤独死」への関心が、社会関係資本のパラダイム転換へと連動していく可能性も無きにしも非ずと思える。

## 【参考文献】

- 朝日新聞 (2010.12.26.～2011.7.31) 「孤族の国」  
<http://www.asahi.com/special/kozoku/>
- 網野義彦 (1996) 『増補 無縁・公界・楽：日本中世の自由と平和』 平凡社
- 板垣淑子 (2010) 「コラム7 日本人の‘無縁化’～NHKスペシャル『無縁社会』の取材現場から見えてきたもの～」 内閣府 『平成22年版高齢社会白書』：73頁
- 稲葉陽二 (2011) 『ソーシャル・キャピタル入門：孤立から絆へ』 中央公論新社
- 上野千鶴子 (2007) 『おひとりさまの老後』 法研
- 上野千鶴子 (2008) 『「女縁」を生きた女たち』 岩波書店
- NHK報道局取材班 (2010) 「NHK『無縁社会』三万二千人『死の記録』全公開」  
『文芸春秋』 88(13)(2010.11 )：330-345頁
- NHK「無縁社会プロジェクト」取材班編著 (2010) 『無縁社会―“無縁死”三万二千人の衝撃』 文芸春秋
- 岡本秀明 (2012) 「都市部在住高齢者の社会活動に関連する要因の検討―地域におけるつながりづくりと社会的孤立の予防に向けて―」 日本社会福祉学会 『社会福祉学』 第53巻3号：3-17頁
- 金恵媛 (2013) 「日韓百寿者に関する研究動向と課題」 『山口県立大学学術情報』 6:49-58頁
- 小辻寿規・小林宗之 (2011) 「孤独死報道の歴史」 立命館大学大学院先端総合学術研究科 『コア・エシックス』 vol.7：121-130頁
- 小辻寿規 (2011) 「高齢者社会的孤立問題の分析視座」 立命館大学大学院先端総合学術研究科 『コア・エシックス』 vol.7：109-119頁
- 権藤恭之(2007.1) 「百寿者研究の現状と展望」 日本老年社会科学会 『老年社会科学』 28(4):504-512頁
- 坂井昭夫 (2012) 「“無縁社会”考―経済学の責務と若干の論点―」 『高崎経済大学論集』 (第54巻第4号)：13-27頁
- 桜井義秀 (2011) 「ソーシャル・キャピタル論の射程と宗教」 「宗教と社会貢献」 研究会 『宗教と社会貢献』 1 (1)：27-51頁
- 斎藤美奈子 (2011) 「『無縁社会』の嘆き節」 『ちくま』：22-25頁
- 斎藤雪彦 (2012) 「都市近郊農村地域における余暇生活とその個人化，孤立に関する基礎的研究：地域社会における生活の個人化と社会的孤立に関する研究 その1」 『日本建築学会計画系論文集』 77 (673)：543-552頁
- 嶋崎東子 (2011) 「ジェンダーと晩婚化に関する一考察―『無縁』社会から『生活縁』社会へ―」 旭川大学 『保健福祉学部紀要』：23-29頁

- 島田裕巳 (2011) 『人はひとりで死ぬ—「無縁社会」を生きるために』NHK出版新書
- 富川亜紀子 (2011) 「生活の支え合いにみる『助』のエスノクラフィー—インフォーマルなサポートの変化とその要因—」沖縄大学地域研究所『地域研究』8号：29-43頁
- WHO編著・日本生活協同組合連合会医療部会翻訳 (2007) 「いきいき高齢期 WHO『アクティブエイジング』の提唱—その政策的枠組みとまちづくりチェックポイント—」萌文社内閣府 (2009) 「平成21年度高齢者の地域におけるライフスタイルに関する調査結果」：31-46頁
- 内閣府 (2010) 「高齢者の社会的孤立と地域社会～『孤立』から『つながり』、そして『支え合い』へ～」『平成22年版高齢社会白書』：52-73頁
- 内閣府 (2013) 『平成25年版高齢社会白書』
- にっち倶楽部 (2008.12) 「百歳の肖像：明日もいい日だ」『にっち倶楽部』vol.53：6-9頁
- \_\_\_\_\_ (2010.6) 「おりおりの随想 (102歳を生きる) その1」『にっち倶楽部』vol.59：53頁
- \_\_\_\_\_ (2010.12) 「百歳の肖像：面白いことがあればそれに飛びついていく方が自分のためにいいと思う」『にっち倶楽部』vol.61：9-11頁
- \_\_\_\_\_ (2011.6) 「百歳の肖像：死んでる暇もないんですよ」『にっち倶楽部』vol.63：8-13頁
- \_\_\_\_\_ (2011.9) 「幸せって何？ 折々の随想 (103歳を生きる) 最終回」『にっち倶楽部』vol.64：60頁
- 宮本要太郎 (2012) 「『無縁社会』の宗教」『宗教研究』(第85巻4輯)：194-195頁
- 牧里每治 (2013) 「巻頭言 無縁社会への挑戦」関西学院大学人間福祉学部研究会『人間福祉学研究』5 (1)：1頁
- 山本和興・平松 優太(2013) 「無縁社会と地域コミュニティの再生：大都市・東京の現状と課題からの考察」『都市政策研究』7：79-112頁

[謝辞]

本論文の作成に当たり、インタビュー参加者の皆様をはじめ多くの方にご協力をいただきました。ここに記して深謝申し上げます。

## 要 旨

본 논문에서는 「無縁=無援」 문제가 고령기의 장기화와 함께 심각한 사회문제로 주목되고 있는 일본 사회의 「無縁社会」 현황 및 담론에 대해 고찰한 다음, 고령기의 「縁活」의 구체적인 사례로 초고령자 (85세 이상) 에 대한 인터뷰 조사 결과를 분석했다.

일본의 전통적 사회관계자본인 「血縁」 「地縁」 「社縁」의 희박화, 붕괴와 함께 사회적 고립이 다양한 연령층, 계층으로 확대되고 있다. 결과적으로 적절한 지원이 필요한 경우에도 지원욕구의 파악이나 제공이 불가능한 상태가 적지 않으며 결과적으로 「孤独死」의 증가를 초래하고 있다. 「無縁」현상에 대해서는 일본 사회의 총체적 위기로 보는 인식이 지배적이다. 문제제기를 한 NHK를 비롯한 미디어의 보도자세는, 「無縁社会」의 원인을 전통적 사회관계의 붕괴에 두고, 문제 해결의 주된 책임을 공공사회에 묻는 경향이 있다. 한편 학계에서는 일본사회가 전후의 핵가족화, 도시화를 추진하는 과정에서 전통적인 「有縁」을 부정한 결과 나타난 현상이라고 해석하며, 또한 「無縁社会」를 부정적으로만 평가하는 사회 인식에 대해서도 이의를 제기한다. 그리고 능동적인 선택의 결과로서 초래된 사회현상에 대한 책임을 사회구성원, 즉 개개인도 회피할 수는 없다고 지적한다. 이같은 양자의 문제인식이나 해결주체에 대한 견해차와는 달리 새로운 「有縁=有援」기반을 구축해야 한다는 점에서는 큰 차이를 보이지 않는다. 특히, 개인의 특성을 살릴 수 있고 강제적 구속력이 약한 「選択縁」으로 「無縁=無援」상태를 보강해나갈 필요성이 강조되고 있다.

이어서, 「無縁」현상의 영향이 나타나기 쉬운 노년기의 「有縁=有援」의 형성, 유지 실태에 대해 사례분석을 통해 살펴보았다. 자료는 필자가 실시한 초고령자 (85세 이상) 인터뷰조사결과로, 특히 「縁活」에 주목했다. 조사참가자들의 「有縁」상태는 개인적 속성이나 생활환경에 따른 큰 차이가 나타나지 않았다. 그 이유로는 「血縁」 「地縁」 「社縁」이 상호보완적인 역할을 하고 있었으며, 또한, 취미활동이나 사회서비스 이용과 같은 「縁活」을 통해 형성된 「選択縁」이 보충하는 역할을 하고 있기 때문으로 분석된다. 이는 고령자와 가족, 그리고 지역사회 등 각 당사자들의 포괄적이고 장기적인 활동을 통해 사회적 관계가 지속적으로 구축돼 왔고, 사회서비스의 활성화를 통해 관계망이 잘 기능되도록 정비해 온 결과라고 할 수 있겠다. 특히 이러한 「有縁=有援」 활동들이 지속될 수 있는 중요배경으로서, 취미활동이나 사회서비스를 통한 활동이 유기적인 연결고리 역할을 하고 있는 점에 주목할 필요가 있겠다. 조사참가자들이 노년기에도 자율적인 생활자세를 유지하고 있는 것 또한 중요한 영향을 미치는 것으로 여겨진다. 조사참가

자들의 「有緣」 상황은 개인적 속성이나 생활환경에 따라 크게 다르지 않았고, 건강장수의 롤모델로서 중용될 수 있는 사례로 주목된다.

キーワード：無緣社会」 社会的孤立 「縁活」 「有緣=有援」 「選択縁」

투 고 : 2013. 11. 30

1차 심사 : 2013. 12. 14

2차 심사 : 2014. 1. 4